国際社会で発信する能力の育成（3）

ー効果的な教材開発を目指してー

筑波大学附属駒場中・高等学校　英語科
平原　麻子・秋元　佐恵・加藤　裕司・多尾奈央子
高橋　深美・八宮　孝夫・山田　忠弘

国際社会で発信する能力の育成（3）

ー効果的な教材開発を目指してー

筑波大学附属駒場中・高等学校　英語科
平原　麻子・秋元　佐恵・加藤　裕司
多尾奈央子・高橋　深美・八宮　孝夫
山田　忠弘

要約

昨年度からの研究テーマ「国際社会で発信する能力の育成」への３年目の取り組みの概要を振り返る。
昨今、社会人だけではなく、学生にも英語でのプレゼンテーション能力が求められるようになってきている。本稿では各学年の取り組みを紹介する。

キーワード：科学的、発信、カリキュラム、教材

1. はじめに

1.1　研究テーマ

本校は、一昨年度より新SSH研究校に指定され、学校全体として以下の目標を掲げて研究活動を進めている。以下は昨年度の論集にも掲載したことであるが、基本的なスタンスに変更はなく、再掲する。

(ｉ)サイエンス・コミュニケーション能力を育成する少人数学習の研究と実践。
(ii)国際科学五輪など、世界を視野に入れた生徒の自主的研究・交流活動の支援。
(iii)科学者・技術者に必要な幅広い科学的リテラシーを育てるプログラムの実施。
(iv)先端技術・研究の成果を活かした授業の普及と次世代SSH教員の養成。
(ｖ)中高一貫SSHの完成に向け、中学に重点を置いたカリキュラム・教材の開発。

英語科では2007年度からの５年計画において次の目標を立てた。

① 科学的内容の教材開発とカリキュラム研究
② 生徒各人が口頭発表する能力の養成と科学的リテラシーの育成

1.2　学校目標達成のための取り組み

５つの学校目標のうち、英語科としては(iv)を除いた4点に関して、具体的に以下のような取り組みを継続している。

１）(ｉ)「サイエンス・コミュニケーション能力を育成する少人数学習の研究と実践」と関連して、科学的教材や論文などを活用し生徒のプレゼンテーション能力の育成をはかる。これについては、後の「2.　具体的な取り組み」の中で実践例を挙げる。

２）(ii)「国際科学五輪など、世界を視野に入れた生徒の自主的研究・交流活動の支援」に関しては、各種イベントに参加し、英語で発表を行う生徒をサポートする。

３）(iii)「科学者・技術者に必要な幅広い科学的リテラシーを育てるプログラムの実施」の一貫として、講演会やワークショップを実施する。

今年度は東京大学の酒井邦嘉先生による講演会「脳から言語へ～科学はここが面白い～」を開催し、ヒトの脳の中にある、言語を介在した認知のシステムとはどのようなものか、というテーマで講演をしていただいた。内容は深いものであるにもかかわらず、受講者の中には中学生も含まれていたため、わかりやすく話をしていただいた。本校生徒が「言語に関連した科学的な視点」を養う良い機会となった。

４）(ｖ)「中高一貫SSHの完成に向け中学に重点を置いたカリキュラム・教材の開発」を視野に入れ、英語科で従来進めてきた中高一貫の６ヵ年のシラバスを発展させる。

To Further Develop Students' Oral Presentation Skills for Math and Science (3)

1.3 授業構成とシラバス

本校の英語の授業時数は以下のとおりである。

中１　「英語」４時間（LL・TT 各１時間を含む）
中２　「英語」４時間（LL・TT 各１時間を含む）
中３　「英語」４時間（LL・TT 各１時間を含む）
高１　「英語 I」３時間＋「OCI」２時間
高２　「英語 II」４時間（TT １時間を含む）
高３　「リーディング」３時間
　　「ライティング」２時間

このうち、高３の授業は選択である。高３で全く英語を取らないことを可能にしているカリキュラムは普通科の学校でも珍しいものであろう。

本校は中学各学年３クラス、高校各学年４クラスと小規模校であるため、各担当者が学年の全クラスを受け持つ。そのため担当者間の進度調整に悩む必要はなく、それぞれの担当者の持ち味で、授業を進めていくことができる。ただし、英語科全体としてひとつの方向性を持てるよう、過去のプロジェクト研究などを通じて、共通理解＝ガイドラインを構築してきた。

ここでは特に、口頭発表に深くかかわるスピーキング指導のシラバス例を示す。

＜基礎期：中学１・２年＞
・個々の発音・連音・リズム・イントネーション(基本)
・つづりと発音の関係（フォニックス）
・絵や物をヒントにした oral reproduction (show & tell, story telling, etc.)
・身近な事柄を英語で説明（自己紹介など）

＜実践期：中学３年・高校１年＞
・リズム・イントネーションの効果的な使い方（応用）
・さまざまな形式による口頭発表（recitation, speech, skit, etc.)
・より内容のある事柄を英語で伝える（体験談、興味のあることの説明等）

＜発展期：高２・３年＞
・より高度な内容を英語で伝える
・自分の考えを相手に正確に伝える
・意見交換を行う（discussion, debate)
（『筑波大学附属駒場論集』第 45 集(2005)）

相当に大まかなシラバスであるが、英語科の場合、教科書が変われば、扱う内容にも変化があり、導入する文法項目にも多少移動があったりする。このことを考えると、大まかなガイドラインを共通理解にして、それを念頭におきつつ担当者が各自のスタイルで授業を展開することがむしろ重要である、と言えるであろう。

2. 今年度の具体的な取り組み

2.1 中学１年生（63 期）　担当：多尾奈央子

2.1.1 はじめに（基礎期初年度の目標）

本学年は、筆者が JTE 単独の通常授業（2 単位）＋ TT 授業（1 単位）を担当し、LL 授業（1 単位）を別の教員が担当している。教材は、通常授業では三省堂の New Crown English Series 1 を、TT では Let's Go (Oxford University Press)をそれぞれ基本としてその他数種の ELT 教材から作成した自主教材を使用している。

生徒達は小学校で多少なり外国語活動で英語に触れてきたとは言え、年度当初のアンケートでも判ったが、「学習する対象」である科目として英語に触れるのはやはり初めてである。今後６年間の指導を考えたときに、この導入期に英語嫌いを作らずに、運用能力や習得には基礎力や実際の使用練習がいかに大切かを伝え理解させること、それを実践することを最重要目標とした。具体的な内容は以下に述べる。

2.1.2 具体的な取り組み

2.1.2.1 通常授業

以下が上述の目標到達のために日々の授業で行ったこと、留意した点である。

① Tongue Twisters

授業の warm up としての位置付けだけではなく、英語を学習するときはその文字だけでなく、音声も併せて学習すること、反復練習で内在化を促すこと、日頃しないような発音や口の動きに慣れることを図った。ただ、早く上手に言えないおもしろおかしさで終わらぬよう、毎回紹介前にポイントとなる音声（発音記号）を示し、それに意識を向けさせた。以下に例を示す。

・Red lorry, Yellow lorry
・Cheap ship trip
・Purple paper people
・Smelly shoes and socks shock sisters.

② 前時の TT 授業の復習・発展

「聞く・言う・話す」主体で学習した内容を、「読む・書く」で復習した。導入した新文法事項をこのときに説明し、知識として理解させることとした。

③ 教科書本文

教科書本文を発展させ、より生徒自身の日常と関連のある教材にすることを留意した。触れた英文を他人事とせず、自身に何か接点を持たせることで受ける・残る印象は大いに違う。本文を例文集としてとらえ、語彙を置き換えると多様に文章を作ることができることを経験で学習できる機会を多く設けた。ここでも音声面での反復練習を徹底した（repeating, chorus reading, read and look up, gapped-read-and-lookup)。

2.1.2.2 Team Teaching 授業

新たな文法事項の導入にあたって、まず使用場面からどういった表現を発話する必要があるかを考えさせ、英語での表現を紹介し、パターン練習から身近なものの語彙に置き換えたり、自分たちで自由な状況を設定してペアで発話練習を繰り返した。読んだり書いたりすることは最低限にした。学期末にはそのまとめとしてスピーチを行ったが、1 学期のスピーチではまだ知っている文法事項が極端に少ないために、発表において大事なポイントである「大きな声で、聞いている人の目を見て、はっきりと話す」を徹底することに集中できた。「話す」ことにおいてはさらに相手に「伝わっている」かが大事であることを指導した。

【2 学期末のスピーチ例】（原文のまま）

My Lucky Bill, 5,000 yen.

Good morning everybody!
My lucky item is （…）old five thousand yen bill. He is Mr. Nitobe. He is intelligent. If I use this bill for Mac Porks, I get（…）fifty Mac Porks! But I don't want to use this bill now. Because（…）this bill was printed, but not now, and its value will be up in future, I think. If I use this bill for Mac Porks, then I will get（…）100 Mac Porks!! Wow, I will get double! How lucky I am! Thank you.

＊（…）は pause 箇所

この２学期末のスピーチは「自分にツキをもたらすもの：My Lucky (item/food/number/T-shirt など)」をテーマとした。上記の例は発話（delivery）に於いても原稿も audience との interaction もとてもすばらしいものであった。原稿中、聞き手には明らかに判らない難しい語があるが、この発表者は聞き手に正しく伝えることに大変工夫をこらし、visual aid としてポスターを数枚用意していた。ポスターをめくるところで自然に pause が入り、自然と効果的な intonation 及び gesture を学習することができた。

2.1.3 今後の課題

単元・言語材料として具体的な「科学」を扱うことはなかったが、本稿1.2.の２）（ii）『「国際科学五輪など、世界を視野に入れた生徒の自主的研究・交流活動の支援」に関しては、各種イベントに参加し、英語で発表を行う生徒をサポートする。』の基礎力を身につけることに集中した。来学期は科学的内容を直接的に使用するまでは行かずとも、「科学」を考えるきっかけとなるものを学習材料として扱う予定である。

2.2 中学２年生（62 期） 担当：山田忠弘

2.2.1 ＴＴ授業（週１時間）

昨年に引き続き、ＴＴの授業では全員がクラスの前で英語を話す機会をほぼ毎回与えている。会話練習(pair work)では、教科書で扱う文法事項を先取りすることもある。以下の２例で(　)内は生徒が好きな語句を入れて行う。

A：What do you like doing?
B：I like (climb)ing mountains. How about you? What did you enjoy doing in this summer vacation?
A：I enjoyed (bodyboard)ing. It was (exciting).

＊　＊　＊

A：(Women) are (better nurses) than (men).
B：Why? Because (women) are (gentler).

また、授業最初の Warm-up として自分の意見やその理由を英語で簡単に言わせることも行っている。

Did you want the Olympic Games to be held in Tokyo?
→Yes / No, because ～.
Do we have to do anything to stop global warming?
→Yes, we have to ～ because ～.
No, we don't have to do anything because ～.

どちらの場合も、正確な発音や文法より、大きな声とわかりやすいスピードでクラス全体に伝わっているかどうかを重視して指導している。難しい語や文法・語

法の誤りについては、クラス全体で共有できるように各発表後に板書やＡＥＴの説明を加える場合もある。

毎学期終わりにはテーマを決めて原稿を書かせた上で、スピーチを行うが(参考資料１)、聞く側の生徒には簡単な評価表に記入させ、聞き取りやすさ、内容の分かりやすさについても評価ポイントとしている。

2.2.2　教科書を使用した授業(週２時間)

教科書は三省堂 New Crown English Series 2 を使用し、１ページ毎に chorus reading→本文説明→自作プリント(参考資料２)による文法演習というオーソドックスな流れで進めている。２学期で教科書及びその文法事項は終了させ、３学期は先取りはせずに別の読み物を扱うのが本校中学の英語では一般的な形である。不定詞までの学習を終えると、ある程度の簡単な文章を読むことが可能になるため、Lesson 7 の「Heat Islands」に関連して、インターネットの Encyclopedia of Earth というページから補助教材(参考資料３)を作り、辞書を使いつつ大意を理解する練習を行った。今後もこのような形での補足を随時行う予定である。

2.3 中学３年生（61 期）　担当：秋元佐恵

2.3.1 基本方針

６年間のシラバスの中で「実践期」にあたる中学３年では、「学んだ知識を使えるアイテムへ」を基本方針に学習を進めている。たとえば、中３の大きな文法項目である関係代名詞も、知識として知っているだけではなく、読んで聴いて、さらに自分のスピーチの中で自然に発話できるようになって初めて「使えるアイテム」になったと言える。中１・中２で学んだことを基礎に、高校に向かって必要な英語力をバランスよく身につけることが目標である。

2.3.2 通常授業での取り組み

週２時間の教科書 *New Crown 3*を用いた授業では、題材に応じて様々な方法を試みたが、以下の３点は年間を通して行なったことである。

2.3.2.1　教科書本文の正しい読み書き

授業中は発音をうるさく注意しながら音読し、最後は文の初めのみヒントを与えて言えるようにする。その後、小テストで確認する。教科書は簡単、と思っている生徒は多いが、基本をおろそかにしない姿勢は大切だと思われる。

2.3.2.2.　学んだトピックの読解・発展語彙の習得

各課のトピックに関する長文や、*Catch a wave*(中学生向け英字新聞)を読解し、語彙をペアワークなどで覚えるようにした。これは、学年のはじめのアンケートで、語彙を増やしたいという声が多かったためである。

2.3.2.3 行事の英作文とフィードバック

文化祭や校外学習などの行事のあと、１０分程度時間をとって英作文を書かせた。事前にモデル文を見せてハードルをあげておくと、良いものを書こうとする生徒が多い。

また、書かせた作文のなかから、そのつど良い作品を複数（２０編ほど）選んで全員に配布するよう心がけた。これには労力が必要だが、掲載された生徒のなかには、その後の取り組みが目に見えて変わる者もあり、今後も続けようと思っている。

以下は文化祭からの作文例である。いずれも学年内では中ぐらいの英語力の生徒だが、習った構文をうまく使えていたので、生徒たちには模範として紹介した。

I was a stage manager. The casts and I have practiced the drama of 3B "Halcion Days". We played the drama three times during the school festival. It was not perfect, but we did our best. We received the excellence award. I am glad, but I'm sorry that we couldn't get the highest award.

I enjoyed all the performances in the school festival. The best performance I enjoyed was the conte [*short comic performance*] of the third year senior high school. Their conte was so nice that I was deeply moved. I want to see it again.

2.3.3 TT 授業での取り組み

週１回ネイティブの英語に触れられる貴重な機会なので、なるべく多くの英語を聞き、発話させることを心がけた。

シラバスでの中３のスピーキング指導目標は「より内容のある事柄（体験談・興味あること）を英語で伝えること」となっている。これに従って、今年度は以

下の６つを行なった。

1. Self-introduction
2. Show & Tell
3. Interview with someone famous [pair work]
4. "My Hero" Speech
5. Telephone Conversation Skit [pair work]
6. Make a Skit based on a Japanese children's story [group work]

スピーチに関しては、１学期はアイコンタクトや発音の明瞭さを意識させるのみとし、２学期になってからスピーチ原稿の作り方を学んだ。教科書でキング牧師を学んだ直後に書かせた "My Hero" Speech は、大教室の壇上でマイクをもって行なったこともあり、１学期よりもパフォーマンス・レベルが上がったと感じた。以下はパフォーマンスも作文も満点の原稿例である。

Hello, everyone. Today I am going to talk about my hero, Bill Gates. Look at this book. You have read this year for your homework this summer, haven't you? As you know, the title of this book is "The Road Ahead." It was written by Bill Gates, and told many new things that will be useful in my future. Before reading it, I didn't know him very much. But after reading it, I got to respect him.

There are two points why I respect him. First, his competence as a student. For example, foresight. In this book, he said, "The Internet will be a road to many places." Actually, today, the Internet is necessary all over the world. Second, his character as a man. He is not only clever but also funny. His smile makes us happy. In conclusion, I would like to be a student like him someday in the future. Thank you for listening.

なお、各学期の最後には、ALT との会話テストを実施した。

2.3.4 今後の課題

全体的に発表能力の高い集団であるが、まだまだ授業改善の余地があるように思われる。英語の場合、ある程度の style や form が必要であるが、初めに形式を与えるのがよいのか、それともある程度自由に発想・創造させたほうがよいのか、常に迷うところである。今のところ、ある程度自由に発表させ、そのなかでよい例を引いて、構造分析させるのがよいかと考えているが、題材や課題によるのかもしれない。今後はより様々な教材に触れさせ、発信能力を高める授業づくりを目指したいと思う。

2.4 中学３年生テーマ学習（61 期）担当：加藤裕司

今年度は、昨年度に引き続き、「アメリカの小・中生の語彙に挑戦」というテーマでアメリカ人の先生が行った授業を聞いて、アメリカの小中学生なら誰でも知っている語彙を増やそうという選択授業を行った。「英語で授業を受けてみる（小学校編）」中谷美佐著、ジャパンタイムズ発行のもので、付属のＣＤを聞かせ、その後スクリプトを与えて解説するという形で行った。扱った内容のうち、数学・科学に関係のある話題は Fundamental Calculations と Areas Of Basic Shapes の２つで、ごく基礎的語彙を学習した。
聞かせた内容のスクリプトの一部は以下の通りである。

Now, let's talk about the **formula** for finding the **area** of a **triangle**. The rule is the same for all **triangles**, but it is easiest to understand by looking at a right **triangle**, one that has a **right angle**. Now, please cut one of the **corners** off your paper. Make sure you cut in a straight line from one **side** of the page to the other. That is a **right triangle**. Lay that piece on top of another corner of your paper and make an exact copy. In a moment, we will use these two little **triangles** to discover why the **formula** for the **area** of a **triangle** comes from the **formula** for the **area** of a **rectangle**.

ここで扱った語彙は以下の通り。

shape, square, circle, equal, corner, perpendicular,

side, height, formula, grid, divide, pointy angle,

base, obtuse angle, slant, rectangle, triangle,

area, perimeter, angle, right angle, four-sided figure,

length, wide, mark off, tall, row, acute angle, one half,

straight line

日本語では小学生にとってもごく当たり前の語彙であっても、検定教科書の語彙は圧倒的に少ないため、生徒にとっては難しく感じたようである。

2.5 高校1年生（60期）オーラルコミュニケーションⅠ　担当：平原麻子

2.5.1 はじめに

本校は「オーラルコミュニケーションⅠ」2単位時間を高校1年生の必修科目として履修させている。週2時間のうち、1時間はLL教室を使って主にリスニング力とスピーキングの基礎力養成を目指し、1時間はネイティブ教員とのティームティーチングにあてて口頭発表能力の育成を図っている。

2.5.2 LL授業での取り組み

（1）教材

ひとつのコースブックを採用することはせず、生徒の興味関心や能力の進捗状況に応じて色々な教材を使い分けている。

特に科学的な英語を意識した教材としては、National Geographic "Foot Print Reading Library"(Thomson Heinle社)を利用している。この教材は1つのテーマに関してDVDによる映像、CDによる音声、およびブックレットによる文字資料が一体化されており、内容も「火山」「北極の生物」「雪」など科学的な英語が自然に学べるよう組み立てられていて使い易い。

（2）LLで鍛えるスキル

総合的なプレゼンテーション能力を伸長させるために、LL授業において意識的に鍛えているスキルは以下のようなものである。

① 概要をとらえるトップダウンのリスニング
② ひとつひとつの音の変化に対する気づき
③ 正確なディクテーション

これは②と深く関連するスキルだが、文法力を鍛える上でも役立つ。例えばI'dやIt'llといった、慣れないうちは聴こえない音も文法知識があれば補って聴くことができるようになる。

④意味を伝えられる音読
⑤シャドウイング

シャドウイングを取り入れた授業は最近の流行ではあるが、リスニングのみならずスピーキング能力をつけるためにも役立つと言われている。1学期の初頭から毎回の授業で少しずつ導入し、現在は1分間140語のスピードに挑戦中である。

練習手順は、1）トランスクリプトを見ながらテープ聞き、音声の特徴をつかむ<listening>→2）テープの後についてリピートする<repeating>→3）テープと同時に読む<overlapping>→4）個人練習→5）テキストを見ずにシャドウイングをする<shadowing>→6）自分のシャドウイング音声を録音し、聞き返して反省材料にする

（3）授業の一例

題材："Arctic Whale Danger!"（上記National Geographicの教材より）

手順：

1) ワークシートを使って新出単語の確認
2) 概要に関する質問を示したあと、DVD（約3分）を視聴。その後、質問の答えを確認
3) CDでナレーションのみを聴きながら、ワークシートに印刷された、細部を確認するための文章にキーワードを書き込んでいく。このとき同時に、ナレーションを各自のブースでテープに録音する。
4) 3）の解答を確認後、ナレーションのトランスクリプトを配布。各自の録音テープを聞きながら、印刷されていない部分をディクテーションして文章を完成させる。
5) トランスクリプトの一部を選び、（2）⑤の手順でシャドウイング練習をする。

2.5.3 TT（ティームティーチング）授業での取り組み

（1）教材

採択教科書『Interact Oral Communication I』（桐原書店）を適宜利用している。その他、担当ALT自らが書いた文章やインターネット上のニュース記事なども使って、できるだけ時事的な英語に触れられるよう工夫している。今年度は新型インフルエンザの話題<資料1>や日米両国での民主党の勝利などを扱った。

（2）TTで鍛えるスキル

①日常的な場面において自分の気持ちや考えを英語で適切に伝える
②人の話を聞きながら的確にノートを取り、その内容を自分の英語でまとめ、発表する。また聞いた内容に関して積極的に質問をする
③ 論理的な話し方を身につける

（3）授業でのタスク

上記のスキル獲得を目指し毎時間、様々なタスクを行っている。また、各学期末には個人やグループで取り組む実技テストを設定している。

各スキルに対応した授業内容とタスクを以下に紹介する。

①毎時間日常的な場面を設定し（例：医者にかかる、デートの約束をする等)、まず短い基本の会話パターンを練習したあと内容をふくらませていき、ペアでのオリジナルな会話に発展させる。

この取り組みの延長線上として、2学期末には6人ずつのグループを作ってそれぞれが 10 分程度のスキットを創作し、Skit Show を行った。

②ALT によるまとまった話（今年度の話題例：Halloween, Chicago, Mt. Fuji など。すべて ALT 本人に身近な話題である）を聞きながらメモを取り、質問に答えたりサマリーを作ったりする。また話の内容について積極的に質問をする。

③1学期末の課題として"If I Were an Entrepreneur" というスピーチを各自2分程度で行った。盛り込む内容としては、その事業を志す理由、成功に導くためのプロセス、全体的なメリット・デメリットなどを論理的に分析し、因果関係をはっきりさせた具体的なスピーチを心がけるよう指導した。どのような分野であれ、こういった意識を持つことが効果的なプレゼンテーションを行う上での基礎力となるからである。

以下にスピーチの1例を紹介する。

If I were to be an entrepreneur, I would run a company which treats DNA. Our DNA is made up of only four elements; A, T, G and C. My company will examine each DNA with PCR, SSCP and so on.

These days, a lot of genes which are apt to cause some diseases have been found by scientists. So a lot of people will need my company because they will want to know whether they have such genes or not.

Then we will examine their DNA, and advise them like this. "You have a few genes which are apt to cause high blood pressure. So you should exercise more than an hour a day."

Our examination of the DNA may help medical treatments made to order. The effect of medicine differs from person to person. We can tell each person the proper quantity of the medicine.

My plan has a lot of problems. For example, we must think about customer's privacy. Still, as scientists elucidate the DNA clearer, my company will become very important all over the world.

2.6 高校1年生（60期）英語Ⅰ　担当：高橋深美

2.6.1 はじめに

高校1年生は英語Ⅰの授業が3時間、オーラル・コミュニケーションの授業が2時間である。なお科目の性質上、私の担当の英語Ⅰでは、かならずしも科学的題材だけでなく、広い分野における読解力・発表力を涵養することを目標としている。

2.6.2 教材の扱い

担当者によっては授業を自主教材を中心に展開する場合もあるが、今年度の英語Ⅰに関しては教科書 *Unicorn English Course Ⅰ* を扱いつつ、およそ2課ごとに関連した分野の発展教材を作成し、そちらも扱うという手法で授業を展開している。

2.6.3 一学期の取り組み

最初の2課は　環境問題を取り上げた 'You can change the world' およびマイナーな競技を取り上げた 'Unique sports' である。環境問題は重要なテーマのひとつであるので、2課を終了した時点で 'Rainforests' (Oxford Bookworm Level 2) を購入させ、ワークシートを作成して、特に重要と思われる章をいくつか読解した。この本をホームリーダーとして自宅で読ませる選択肢もあったが、この時点では授業で使用した。

次の2課は動物の知性を扱った 'Alex the parrot' と98歳で読み書きを習った George Dawson を取り上げた 'Life is so good' である。'Life is so good' は教科書では老いても学ぶ意欲を失わないアフリカンアメリカンの話になってしまうが、彼の自伝には彼が実にさまざまなことを経験して来たことが述べられており、その一部を教材化してみた。特にまだ十代のうちに自分の友人が彼の目の前で白人たちに命を奪われる、という経験を語った個所は、アメリカという国の過去の一側面を生徒に強く語りかけることとなった。これに関しては生徒から「Dawson さんの経験を知ると教科書の英文がとても軽く見えてくる」という感想が寄せられた他、後述するスピーチ原稿にも「日本語版だが Dawson さんの伝記を読んでみた、その上で考えたことを述べる」といったものがあり、生徒の関心を喚

起するという点では成功したと考えている。

2.6.4 二学期の取り組み

2学期はまず教育実習生に、夏目漱石の滞英時代を述べた課 'Soseki in London' を担当させた。この課を終了した後に 講談社インターナショナル版を参考にして英語で語られた「坊ちゃん」の一節、特に赤シャツと野だいこを坊ちゃんと山嵐が懲らしめる場面を教材して使用した。「坊ちゃん」はよく知られた作品であるほか、教材化した部分が正義感に満ちた熱血漢が描かれているためか、当初こちらが予想したより、生徒は意欲的に読んでいた印象をもった。

続いて2学期は豆腐の歴史と現状を述べた 'Tofu: a world favorite' 人類の拡散の道筋を逆にたどった旅路を述べた 'The Great Journey' 地雷撤去作業中に重傷を負いながらも後に長野オリンピックの聖火ランナーを務めた Cris Moon を扱った 'One step beyond' を扱った。Cris Moon の著作には邦訳版「地雷と聖火」、教科書のレッスンと同名の 'One step beyond' (英語版のみ) があり、当初は後者からの教材化を検討したが、約４００ページほどからなる書籍の約３分の１がカンボジアでクメールルージュに拉致されてから解放されるまでの詳細な記録に費やされており、なかなか教材として適した個所が見つからず、授業において書籍の内容を紹介したのみで、教材化は見送った。

この３課に関しては、食文化を発展教材のテーマに絞り、日本固有の食文化、アメリカにおける肥満の問題、スローフード運動などを取り上げた。

2.6.5 スピーチの実践

２学期末には生徒にスピーチの課題を設けている。今回は、これまでに扱った教材に何らかの関連があるものをテーマにして１分程度の発表をする、ということにした。

本稿を書いている時点ではまだスピーチは未実施であるが、原稿は提出されているので、生徒が選んだテーマのうち代表的なものを以下に紹介する。

1)「環境問題」関連

- Is CO2 a real cause of Global Warming?
- What should we do to protect the environment?
- Ozone holes
- Endangered species
- Gorillas
- How to reduce garbage

2)「食文化」関連

- History of soybeans
- Food cultures in China
- Let's eat natto
- How to make freeze-dried tofu
- How to make tofu

3) 「夏目漱石、George Dawson 」関連

- About 'Kokoro'
- Soseki's literary works
- Botchan train in Matsuyama
- 1000 yen bills
- George Dawson's happpiness
- George Dawson's life

簡単なスピーチは学年当初にも行ったが、その時点では特に声量、テンポ、アイコンタクトの３点を指導した。今回の指導の要点は、ひとつのテーマについて語り、coherent であること、delivery を充実させることの２点としている。今回の実践を踏まえて、より発展的な発表活動を３学期に実施する予定である。

2.7 高校２年生（59期）英語Ⅱ 担当：八宮孝夫

2.7.1 はじめに

高校２年生が学習する「英語Ⅱ」にもなると、題材も抽象的なものが増え、また１回の授業で扱う分量も多くなるので、ともすれば「音読」などがおろそかになりがちである。しかし、oral communication のまず第一歩は、音声による伝達がきちんとできることであり、そのためには日頃の音読をしっかり行うことが重要である。

昨年度の高１では、様々なジャンルの読み物、とりわけギリシャ神話、ベオウルフなどの英雄譚、ボブ・グリーンのエッセイなどの実践を取り上げた。今年度、高２では、あえて音読の大切さを再認識するような教材を意識して取り上げたので、その報告をしたい。

2.7.2 １学期の実践

2.7.2.1 詩の授業

音読の大切さを認識させるためには、音読をするに足る音声的に優れた作品に触れることが肝心と思い、「詩」を扱うことにした。近年、「詩」は教科書でほとんど取り上げられない。申し訳程度に、裏表紙などにお飾りとして載っているだけである。

しかし、だからといって、かつてのように Wordsworth の Daffodils などをいきなり取り上げても、学習者に

は敷居が高いであろう。筆者は、導入として A.A. Milne の子供のための詩を利用した。Milne は *Winnie-the-Pooh* の作者として有名であるが、2 冊のプー作品と並んで 2 冊の幼年詩集も書いている（*When We Were Very Young*(邦訳『クリストファー・ロビンのうた』)と *Now We Are Six*(邦訳『くまのプーさんとぼく』)。例えば、Wordsworth と同じタンポポを主題にしたもので次のようなものがある。

Daffodowndilly

She wore her yellow sun-bonnet,
  She wore her greenest gown;
She turned to the south wind
  And curtsied up and down.
She turned to the sunlight
  And shook her yellow head,
And whispered to her neighbour:
  "Winter is dead."

まず、タイトルの Daffodowndilly は daffodil の方言名なので、初めは何についての詩かわからず、全体が擬人法で書かれているため、"she"が誰（何）であるのか、読みながら推測する楽しみがある。また、最後の一節"Winter is dead"も、少しブラック・ユーモアが効いている。音声的にも「弱強」からなる典型的な英語の詩であり、各行末に韻も踏んでいる。何度も声に出すうちに、だんだん花であることがわかっていく面白い作品である。生徒と英語で interaction しながら展開できるという利点もある。

このような作品を毎時間取り上げ、平行して *Poetry for You* という英国の詩人 C. Day Lewis の書いた詩の入門の文章を読み、詩の意義や技術的な点にも触れた。詩ばかりでなく歌の歌詞(Simon & Garfunkle の I am a Rock など)も取り上げ、最後には桂冠詩人である Tennyson の The Eagle という短い詩を読んだ。生徒の反応はさまざまであったが、学期末のパフォーマンスで、詩を取り上げた生徒もいるので、追って紹介する。

2.7.2.2 くまのプーさん

高校 2 年生で『くまのプーさん』か、と思われるかもしれないが、Milne の詩を扱った流れで、*Winnie-the-Pooh* も読むことにした。以前、中学 3 年生のテーマ学習という選択授業で扱い、作品に用いられている言葉遊びの巧みさに驚いた。とりわけ、音声を意識しないと面白さのわからない言葉遊びもあり、たわいのない筋立てだが侮れない作品である。言葉遊びの 1 例を挙げると、イーヨーというロバの尻尾がなくなり、プーさんが森の長老であるフクロウのアウルに助言を求める。尻尾を探してくれた者に、報奨金を出せばいいという意味でアウルは次のように言う：
"The thing to do is as follows. First, Issue a Reward. Then –"

これに対して、プーは"Just a moment. What do we do to this – what you were saying? You sneezed just as you were going to tell me."と言って、「なぜくしゃみするのか」と尋ねるのである。これは、語彙の少ないプーが issue という語を知らないために勘違いして起こる言葉遊びであるが、音声的な視点がないとそれがわからない仕組みになっている。

これは 1 例であるが、これ以外にも、それぞれの登場人物の描き方が優れており、高校 2 年生にも充分楽しめ、かつ勉強になる作品である。授業展開としては、事前に 1 章分プリントを配布しておき、内容理解の質問を与えながら、言葉遊びのポイントを発見させる。授業では英語で interaction し、筋を追いながら、言葉遊びのポイントを質問しながら解説していく。プーさんの朗読 CD は複数発売されており、比較しながら聞かせるのも効果的である。

課の終了後、感想をレポートにまとめる課題を出した。一つ紹介する：

"Winnie-the-Pooh" is a great story. Frankly speaking, I have never read a children's story that was organized and amusing as this one. For me, it was fun to reveal the intention of the author. The author uses many techniques such as rhymes and visual effects. These efforts make Pooh different from the other children's stories.

Characters in "Winnie-the-Pooh" all have different personality, which makes the story interesting. Everyone likes pooh, who is a little foolish but likable. Coward Piglet has a high popularity because of his stupid mistakes. Perhaps, children like these characters because they are cute, and also children can have a condescending attitude toward them.

As I've mentioned, the author uses various methods to give hints to the readers. Even

pictures give clues to the mystery. I felt as though I was a detective trying to find out the answer to Pooh's problem while reading (Pooh can't possibly figure out the truth!). The story I like the most is the story which Eeyore loses a tail. I didn't realize that Eeyore's tail was illustrated the first time I read it. Afterwards, I felt triumph as I found Eeyore's tail used as a bellrope of Owl's house.

I understand why this story has been popular for a long time. I enjoyed reading it very much. In my opinion, the original is better than the Disney version(I've changed my mind!).

レポートは必ずしも英語による感想を要求しなかったが、この感想は多くの生徒の感想を反映しているものである。最後に the Disney version とあるのは、ディズニーのアニメ版プーさんも比較のために見せたためである。オリジナルと異なるバージョンと比較させることができる点も、この作品が教材としても優れた点である。

2.7.2.3 A Tour of the Brain

これは、音声重視の教材とは異なる。学期ごとにあまりジャンルが偏らぬように、文学的な作品と同時に科学的な読み物も取り入れるようにしているためである。*Unicorn English Course II* の Lesson 5 であるが、本来、米国の雑誌 TIME に載った記事に基づいた教材である。しかし、本来の記事を相当圧縮しており、元の記事とは、論旨が代わっていたり、異なる段落が一つに繋がれていたりして、必ずしも、読みやすい教材とは言えなかった。男女の脳のどちらが優れているか、という話題も、どちらと断定できるわけではなく、結論も教育現場に配慮したものになっており、その点でも,元の記事の趣旨とは異なっていた。もちろん,寺田（2008）のような実践もあり、扱い方によっては面白い教材である。

2.7.2.4 1学期の発表活動

昨年と同様、扱った教材のフィードバックとして、生徒に1学期の教材に関して英語による発表を求めている。指示は以下の通りである：

＊今学期の「パフォーマンス・テスト」

以下のテーマから1つ選んで2分以内でスピーチすること。

1)詩について：扱ったものを選んで、解説・感想を述べる。好きな詩、歌の歌詞について紹介する。
2)くまのプーさんについて：章を選んでサマリーを作る。感想を述べる(言葉遊びについてなど)。 ディズニーとの比較など。
3)脳について：男子校 vs 共学校の良し悪しなど(2人でディベートしてもよい)。脳について、解説する。
日程：7月8日、9日(出席番号順)

発表は、期末考査後の特別時間割の時間に2時間設定した。実際に発表したテーマを以下にいくつかあげる：

1) Poetry for You 関連
   - Nursery Rhyme の London Bridge の紹介
   - Pippa's Song (by Robert Browning)の紹介
   - Life is ... (by Mother Teresa)の紹介
   - Bridge Over Troubled Water (S & G)の紹介
   - Biography of William Wordsworth
   - Chicken Lips and Lizard Hips（言葉遊び）
   - Japanese *Tanka*
2) Winnie-the-Pooh 関連
   - 1～5章の summary
   - 未修の6章 summary
   - the theme song of Winnie-the-Pooh
   - The House at Pooh Corner の紹介
3) Brain 関連
   - "Game" brain
   - TV drama "Mr. Brain"
   - Early Childhood Education
   - Japanese Memorization Techniques
   - "Mozart" Effect
   - Brain Training (脳トレ)
   - Neuromyth

なお、補足資料としてそれぞれの発表例をあげる。(別紙資料)

2.7.3 おわりに

当初「詩」について、関心を持ってくれるか不安だったが、発表を見る限り、こちらの意図を汲んで、時間が許せば取り上げたであろうような詩をあげる生徒が多かった。The Beatles, ABBA, Michael Jackson と

いった歌手の歌詞も取り上げられた。とりわけ、Michael Jackson は直前に亡くなったこともあり、tribute として取り上げたようだ。

Winnie-the-Pooh については授業で扱った以外の章や、別のシリーズについて言及してくれたものもあった。ディズニーのプーのテーマソングをかけながら、その内容を扱ってくれた者もいた。やはり、子供の頃日本語で読んだプーを再度英語で読むというのはいい経験になるようである。

Brain は、テーマが難しいと思ったが、「ゲーム脳」「脳トレ」など、意外に身近なテーマであった。脳事態の働きを説明した生徒もいたが、術語に難しいものが多く、そのあたりを事前に聞き手に伝えておくべきであった。

実際の音声や板書を活用するなど、高１のときの発表よりも、幾分進歩があったように感じられた。さらに、パラグラフなどを意識した発表原稿になるよう指導したい。

2.8　高校３年生（58 期）　担当：加藤裕司

高校３年生のＳＳＨ関連の授業の実践は、同じ学年を今年度も担当したので、昨年とほとんど変わらない。科学関連の教材を多く読ませるように努めた。高３は入試を控えているので、入試問題で科学の話題をあつかったものを教材として用い、生徒のモチベーションを高めた。科学の教材は、それ以外の、文学的、歴史的、哲学的教材とは違って、いわゆる「説明文」が多いので、専門用語さえわかれば、意味はとれたようである。この意味で、科学的語彙を、もっと低学年時から指導しておけば、さらに読み取りが容易になったと思われる。

科学の話題を扱った教材として読んだのは、以下のような話題のものである。

（例）・Virtual School
・DNA
・Newton's Experiment with Prisms
・Stress
・DNA Testing
・the Process of Writing
・the Physical Basis of the Mind

これらの話題のうち、'Newton's Experiment with Prisms'について述べられたものの一部は以下の通りである。

Different accounts exist of why Newton gave the rainbow, or white light spectrum, seven colours—violet, indigo, blue, green, yellow, orange and red. One account involves his interest in musical harmonies, where there are seven distinct notes in the scale. Newton, the story goes, proceeded to divide up the spectrum into spectral bands with 'width' (ranges of wavelengths for each color) corresponding to the ratios of the small whole numbers in the scale. Another account involves the culture of the time, in which the number seven had magical or biblical significance. Either way, Newton's seven colours are not the best choice. If we are to divide up the spectrum into the colours we perceive, although strictly the colours do merge to form an infinite sequence, then today we prefer to omit indigo from Newton's categorization. Indigo is not really seen as a separate colour. This leaves the modern spectrum with the order: violet, blue, green, yellow, orange, red. Six colours.

3　まとめ

本校英語科教員による実践報告は以上である。各教員が共通のガイドラインとして、中学１・２年では、まず人前できちんとしたスピーチをするという練習を行い、それ以降の学年でそれぞれに内容のあるスピーチ、および科学的内容を織り込んだスピーチの組み立てを行う、という認識を持ち、それを個々の授業計画に従って実践していることがわかっていただけると思う。

ただし、中学・高校で扱える、汎用性のある科学的教材の開発はまだ、十分ではなく、一方で、低学年においては習得した言語材料および文法事項から主張する内容にも制限が自ずと生じてくる。今後は発達段階に応じたシステマティックなカリキュラムにつながるような教材の開発と実践を行いたいと考える。

＜参考文献＞

寺田恵一（2008）「パラグラフリーディングからパラグラフライティングへ」『筑波大学駒場論集第 48 集』
久保野雅史他（2006）「数学・理科に関する口頭発表能力の養成(3)」『筑波大学附属駒場論集第 45 集』
鶴田知佳子、柴田真一（2008）.『スピーチの達人に学べ―リーダーの英語』コスモピア
本名信行、竹下裕子（2007）.『スピーチ・プレゼン・ディベートに使える英語表現集』　ナツメ社

George Dawson and Richard Glaubman (2001) *Life Is so Good*; Penguin Books
Chris Moon (1999) *One Step Beyond;* Macmillan
アルク編集部 (2006). 『ＢＢＣ２０世紀クロニクル Vol.1』アルク

別紙参照

中学２年生　①

very good! 020

中２英語　１学期スピーチ原稿

Class　2－(　　) Number(　　) Name(　　)

タイトル：　My Dream

注意

・スピーチ時間は１分以内（昨年度と同じようにビデオカメラで撮影する）
　原稿はこの用紙を越えない範囲に収めること(スピーチ終了後提出)
・きちんと日本語で構成を考えてから書き始めること(教科書 Lesson5 を参考にすること)
・採点のポイントは次の５項目とする。
　声量、スピード、正しい発音、アイコンタクト(聞き手の方を見ているか)、内容(原稿)のわかりやすさ

Hello everyone. I'm going to tell you about my dream.
I want to be a novelist. There are three reasons.
First, I like reading books. I often read fantasies and science fictions. So I want to write these kind of novels in future.
Second, anything is possible in novels. I can make my world, and I can send my message in many ways.
Third, good novels can influence many people. I have changed very much by books. So I want to change many readers.
Thank you.

中学２年生　②

中２英語　比較級・最上級（・原級）練習問題②

【１】日本語に直しなさい。

(1) As it was snowing outside, I drove more slowly than usual.

(2) Even the most careful person can make a mistake.

(3) I waited for fifteen minutes … they seemed as many hours to me.

【２】正しい英文になるように、[　]内の語を並べかえなさい。

(1) He [loudly / all / most / always / of / speaks].

(2) This hotel [convenient / that / than / is / much / more / one / new] over there.

(3) The population [large / as / as / is / that / about / Tokyo / of / twice] of Chiba.

【３】英語に直しなさい。

（1）出来るだけ多くの女の子と話をしなさい。

（2）これよりもっと面白い読み物を貸してくれないか。

（3）家族と時間を過ごすことは、ほとんどの国において、最も重要なことの一つです。

中２英語　Lesson 7　補足資料①　　中学２年生　③

Heat island - Encyclopedia of Earth

http://www.eoearth.org/article/Heat_island

Encyclopedia of Earth

Heat island

Content Source: Environmental Protection Agency (other articles)
Article Topics: Urbanization and Pollution
This article has been reviewed and approved by the following Topic Editor: Cutler J. Cleveland (other articles)
Last Updated: October 31, 2008

Table of Contents

1 Introduction
2 Causes of heat islands
3 Impacts of heat islands
4 Mitigation of heat island effects
5 Further Reading

Introduction

①The term "heat island" refers to urban air and surface temperatures that are higher than nearby rural areas. Many cities and suburbs have air temperatures that are 2 to 10°F (1 to 6°C) warmer than the surrounding natural land cover. Figure 1 shows a city's heat island profile. ②It demonstrates how urban temperatures are typically lower at the urban-rural border than in dense downtown areas. The graphic also show how parks, open land, and bodies of water can create cooler areas. Elevated temperatures can impact communities in a number of ways. Elevated temperatures can impact communities by increasing peak energy demand, air conditioning costs, air pollution levels, and heat-related illness and mortality.

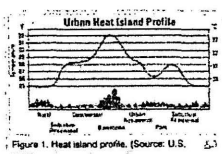

Figure 1. Heat island profile. (Source: U.S. EPA)

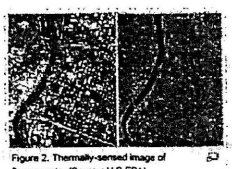

Figure 2. Thermally-sensed image of Sacramento. (Source: U.S EPA)

The remotely sensed image of Sacramento, CA in Figure 2 illustrates the heat island phenomenon. In the aerial photo (left), the white areas, mostly rooftops, are about 140 degrees Fahrenheit (60 degrees Celsius) and the dark areas, primarily vegetative areas or water, are approximately 85-96 degree Fahrenheit (29-36 degrees Celsius). ③[redacted] In the thermal image (right), Sacramento's rail yard is the orange area east of the Sacramento River, which flows from top to bottom. Red and yellow areas indicate hot spots and generally correspond with urban development, while blue and green areas are cool and generally correspond to the natural environment.

[3] Cities in cold climates may actually benefit from the wintertime warming effect of heat islands. Warmer temperatures can reduce heating energy needs and may help melt ice and snow on roads. In the summertime, however, the same city may experience the negative effects of heat islands.

Figure 1. Urban Heat Island Profile

Word List

urban (　　) profile (　　) rural =(c　　)
suburban residential (　　) commercial (　　) downtown (　　)

【１】下線部①②を日本語に訳しなさい。

①The term "heat island" refers to (1)urban air and surface temperatures (2)that are higher than nearby rural areas.

注：下線部は(2)→(1)の順で訳すこと。また(2)の that は訳さないこと。

Word List

term (　　) refer to (　　) nearby (　　) area　地域

②It demonstrates how urban temperatures are typically lower at the urban-rural border than in dense downtown areas.

Word List

demonstrate =(s　　)　　how ～「どのように～か」→「～ (　　)」
typically　一般的には　　border (　　)　　dense (　　)

【２】■部分③に入る英文になるよう、(　　) 内に適切な１語を入れなさい。

「最も高温な地点はビルで、(左図では)様々な大きさの白い長方形に見えています。」

(　　)(　　)(s　　) are the (　　), seen as (　　)(r　　) of (v　　)(　　).

【３】最終３行(Cities in cold climates ～ the negative effects of heat islands.)の要旨を日本語で書きなさい。

Word List

climate (　　) actually 実際には　benefit (　　) effect (　　)
reduce (　　) experience(v.) (　　) negative (　　)

What You Can Do to Stay Healthy

- **Stay informed.** This website will be updated regularly as information becomes available.
- Influenza is thought to **spread mainly person-to-person** through coughing or sneezing of infected people.
- **Take everyday actions to stay healthy.**
  - Cover your nose and mouth with a tissue when you cough or sneeze. Throw the tissue in the trash after you use it.
  - Wash your hands often with soap and water, especially after you cough or sneeze. Alcohol-based hands cleaners are also effective.
  - Avoid touching your eyes, nose or mouth. Germs spread that way.
  - Stay home if you get sick. CDC recommends that you stay home from work or school and limit contact with others to keep from infecting them.
- **Follow public health advice** regarding school closures, avoiding crowds and other social distancing measures.
- Find healthy ways to **deal with stress and anxiety.**
- Call 1-800-CDC-INFO for more information.

2009 H1N1 Flu and You

What is 2009 H1N1 flu?

2009 H1N1 (referred to as swine flu early on) is a new influenza virus causing illness in people. This new virus was first detected in people in the United States in April 2009. This virus is spreading from person-to-person worldwide, probably much the same way that regular seasonal influenza viruses spread. On June 11, 2009, the World Health Organization (WHO) signaled that a pandemic of 2009 H1N1 flu was underway.

What are the signs and symptoms of this virus in people?

The symptoms of 2009 H1N1 flu virus in people include fever, cough, soar throat, runny or stuffy nose, body aches, headache, chills and fatigue. Many people who have been infected with this virus also have diarrhea and vomiting. Severe illness and death has occurred as a result of illness associated with this virus.

高校２年生　①

Mother Teresa is a Catholic sister who devoted her life for poor people and orphans in India. She also established an diocesan congregation called Missionaries of Charity (and it is called 神の愛の宣教者会, in Japanese.) The congregation is now maintained by her successors. In 1979, She received a Novel peace prize for her effort.

She is very famous for her kindness, and the poetry made by her is also famous for same reason.

This poet printed on your handouts, is one of her best work.

Life Is ...

Life is an opportunity, benefit from it.
Life is beauty, admire it.
Life is bliss, taste it.
Life is a dream, realize it.
Life is a challenge, meet it.
Life is a duty, complete it.
Life is a game, play it.
Life is a promise, fulfill it.
Life is sorrow, overcome it.
Life is a song, sing it.
Life is a struggle, accept it.
Life is a tragedy, confront it.
Life is an adventure, dare it.
Life is luck, make it.
Life is too precious, do not destroy it.
Life is life, fight for it.

- Mother Teresa

The amount of poetic techniques on this poem is not so many, but repetition of simple forms makes the poet beautiful, essencial and attractive.

I think what Mother Teresa is trying to say, is people's life is extraordinary difficult, it is true that you may have bunch of trouble and feel depressed about it, but life is beautiful, take a positive attitude toward it and you will be able to enjoy your life.

I think we should remember the fact that life is precious and beautiful, and get along with difficulties.

高校２年生　②

英語スピーチ　　2－4 [redacted]

Hello, class. Today I made a summary of chapter 6 from Winnie-the-Pooh. It is a story about Eeyore's birthday.

One day, Eeyore stood beside a stream and was feeling miserable. Then Pooh came out of the bracken behind him and Eeyore complained that it was his birthday, but no one noticed it. Because Eeyore looked so sad, Pooh decided to give a present for him and went home.

When Pooh reached his house, he saw Piglet in front of his house trying to reach the knocker. Pooh was kind enough to knock it for him, even it was his own house. Pooh and Piglet talked to each other and Pooh decided to give honey for a present and Piglet decided to give a balloon.

Then Pooh took some honey in a jar and went off for Eeyore. But on his way, he felt a funny feeling and he started to eat the honey. After he ate all the honey, he remembered that he was going to give it to Eeyore. He thought for a while and decided to give the jar as a useful pot. He wanted to write "A Happy Birthday" on it, so he went to ask Owl to do it. But when he asked Owl to write "A Happy Birthday", Owl was unsure of spelling of it and wrote: "HIPY PAPY BTHUTHDTH THUTHDA BTHUTHDY". Pooh felt it was too long, but Owl explained that it says: "A Very Happy Birthday with love from Pooh"

At that time, Piglet was running with his balloon. But he ran too fast, so he fell down and burst the balloon. Then Piglet went to Eeyore sadly and explained that his present had burst and became into small pieces. But when Pooh came with his pot later, Eeyore became excited that he can put the balloon in the pot. Pooh thought a balloon was too big to put in the pot, but because the balloon is now some small pieces, Eeyore could put the balloon in and out of the pot and he was very happy.